

上勝「彩」20年

山あいの上勝町に、全国各地から視察が相次いでいる。来月には、町人口（約二千百人）の半分近い千人が訪れる予定というから驚く。

目当ては、町の中心産業に成長した彩事業や、ごみの再利用・再資源化の取り組みなどである。

彩とは、料理に添える「つまもの」のこと。百九十戸の農家が四季折々の木の葉や野草などをパツクに詰めて各地に出荷している。担い手は抱年寄りたちで、

山の町から元気もらおう

平均年齢は七十歳に近い。年に二億五千万円を売り上げ、「おぼあちゃんの家」は「ビジネス」として全国に知られるようになった。

事業開始から今年で二十年目。取り入れたのは、町の第三セクター会社「いろどり」の副社長、横石知二さんらだ。

当時、横石さんは地元農協の職員。回覧でたまたま耳にした女性客の会話がヒントになった。料理に添えられていたミニシがとてもきれい、なごこし喜りに

感心していた。

葉っぱなら山にいくらでもある。これは販売になるかもしれない、と思ったという。だが、葉を持ちかかれた農家は「葉っぱが売れるんだ、たら苦労はない」と半信半疑。つまものがどう使われているかを調べるため、給料をつぎ込んで料理師達に作る横石さんのいちずさに、参加農家が賛成していった。

いまや、彩商品は三百種類を超え。どんな注文にも素早く自在に応えられる

のが強みで、抱年寄りの細かい手作業がそれを支えている。

抱年寄りは、葉っぱを摘み取り出荷する作業に明け暮れる毎日だが、「今、とても幸せ」という人が多いようだ。

最近、彩農家の人たちを撮った写真集が徳島市の写真館から出版され、話題になっている。どのページにも抱年寄りのこぼれるような笑顔があふれている。

上勝町の高齢化率は47%。県内で最も高齢化の進む過疎の町だが、寝たきりの

抱年寄りはほとんどいないという。

「本当の幸せは生きがいを持つこと。おぼあちゃんたちがそれを教えてくれる」。横石さんは、そう語っている。彩は、私たちにもいろいろいるなことを教えてくれる。



彩農家には外国からも視察に訪れる。青モミジのバツク訪めを体験するタイの自治体職員ら。今年8月。

まず発想の大切さ。見なれたものも視点を変えると、チャンス糸の糸口が見える。簡単にあらぬないチャレンジ精神と粘り強さも要する。一人の力は小さくとも、仲間が増えれば地味を変え大きな力となる。抱年寄りの元気の源は「生

きがい」を持っていること。

そんな視点や発想で、足元の地味を見直してみたらどうなるだろう。明日へのヒントが見つかるかもしれない。上勝町のユニークな取り組みは、彩にとどまらない。「ごみゼロ（ゼロ・ウェイスト）宣言」もそう

だ。ごみを三十四種類に分別し、徹底した再利用・再資源化に取り組んでいる。二〇一〇年までにごみの焼却・埋め立て処分をゼロに近づけるといふ。

大都市圏の好景気とは裏腹に、県内をはじめ地方の多くの自治体が、過疎化、財政難、経済の冷え込みにあえいでいる。「このまま

では立ち行かなくなる。何とかしなければ」との危機感が強い。上勝町への相次ぐ視察にも、その一端が表れているのかもしれない。

やれることは何でもやってみる。いまこそ、そんなチャレンジ精神が必要だ。